第二部 研究ノート

## 祐信の服 ―風俗絵本と小袖雛形本を手がかりに 飾意匠とその特徴

加茂瑞穂 か b

みず ĺ

### はじめに

もと、出版されたのが小袖雛形本であった。人々の着用する衣服は彩り豊かになった。そのような時代背景の八々の着用する衣服は彩り豊かになった。そのような時代背景の江戸時代にはさまざまな装飾が小袖に施されるようになり、

掲 ティ から、 物としての性格も持ちあわせてい など古典文学とも関連させた意匠が掲載される場合もあり、 される小袖 参考とされていたことがうかがえる。 る小袖と照合することもでき、 流行をうかがうことができる資料でもある。 小 した版本で、寛文六年(一六六六)に出版された『御ひいなかた』 ?載された小袖の背面図は、 袖 ーフの名称も添えられていて、 「雛形本には、 袖雛形本とは、 再板なども含めおよそ寛政年間まで継続して出版され の背面図は、 小袖の背面意匠とともに、 おもに小袖の背面意匠を掲載した体裁を採用 時 '流にあった意匠に加え、 版本の中だけにとどまらず、 小袖雛形本が小袖を誂えるために 具体的な技法や時代の傾 そして、 また、 染織技法や色調、 小袖雛形本に掲載 小袖雛形本に 『源氏物語 現存す 読 向 Ŧ

不明な点が多い。 小袖雛 形本を手がけており、 方、 形 本の内容に比べ、 小袖雛形本の意匠を手がけた絵師は、 しか Ļ 絵 それを手がけた絵師についての詳細は 師 菱川師宣や西川 :が当 時 0 服 飾 意匠 祐信ら人気絵 .に対しても影響を 無名の者も多く、 師 b 小 袖

方 意 匠

モティ

1

・フの

選択

から、

祐信が描く小

袖意匠

. の

傾

向

や、

徴

そして、

描

.に使用される個別のモティーフをとりあげる。

を検討してみたい。

まず

は

西

川祐

信が

手がけた小袖雛形本や絵

期 与えていたといえよう。 れ が次に挙げる三 の 姷 正 徳から享保期にかけて小袖雛形本を手がけて 種 の小袖雛形本である。 本稿においてとりあげる西川 祐信 7 た。 は 作 そ 画

|徳ひな形』 | 正徳三年 (一七一三)

「川ひな形』

西正

『享保ひな形

享保初年頃カー

う。 この 61 別 て検討されてきた。 性 対しどのような影響を与えていたのか関心が集まるところであろ 風俗をとりあげた絵本や女性を描く際、 き 人女郎品定』のように、 か 雛形本もあり、 ľ の の これまでの研究においても、 詳 そこで、 意匠については、 衣裳を描く際に参照されていることは、 ほかにも西川祐信作とされる小袖雛形本や 祐信はこの他にも多くの絵本や肉筆画を手がけており、 :細に描いていた。 本稿では試みとして、 祐信の小袖雛形本に対する影響がうかがえる。 ただし、 十分な検討がおこなわれているとはい その 女性の風俗や服飾表現に対して関心を抱 小袖雛形本や風俗絵本に描かれた個 ため小袖雛形本を手がけた祐信が 祐信が手が 小袖雛形本と風俗絵本の服 小袖 他 けた小袖 雛形本が服飾表現に 西川」 の風俗絵本を用 雛形本が女 と題された えなな 百百

本に描かれる服飾表現に関する先行研究を整理しておきたい

#### 服 西 飾 Ш 表 祐 **|現に関する先行研究** 信 0

徳ひな形』から取材されていることを明らかにした。 0 して、これらの絵本に描かれる女性の衣裳文様、 本常盤草』『絵本浅香山』に描かれる女性の衣裳を考察した。 ついて」 みられる衣裳文様―祐信作 小沢 絵本が、 \直子・伊藤紀之・河村まち子氏らによる「西川祐信絵本に 。では、『正徳ひな形』を中心として、『百人女郎品定』 『絵 小 袖雛形本と同様に衣裳の文様に配慮して描かれてい 『正徳ひな形』とその絵本との対応に 技法、 また、 、構図が 祐信 Ē そ

たことを指摘した。

えたと指摘した 光琳模様を描くことにより、 している。。 模様』では、 模様を考案したことを明らかにした。 様と呼ばれる既存の模様に対しても先駆的な試みを加え、 具体例については後述するが、 に入ってから流行したとされるため、古家氏は『正徳ひな形』 考察した論考である。 心にし おける墨絵模様の表現は、比較的早期のものと述べている。 る表現を『正徳ひな形』で取り入れていた。墨絵模様は、 古家愛子氏の「西川祐信の服飾表現について―小袖雛形本を中 -は、 小袖雛形本における祐信の服飾表現やその独自性を 小山氏は祐信が絵本の中で、 小山弓弦葉氏が、祐信が描いた光琳模様小袖 祐信は「墨絵模様」と呼ばれる墨 市井での光琳模様の流行に影響を与 小袖雛形本の中で祐信は、 また、『日本の美術 女性の小袖に繰り返し 光琳模 独自 色によ に着目 正徳期 また、 光琳 に 0

- \* \* 松平進氏が『師宣祐信絵本書誌』(青裳堂書店、昭和六三年〈一九八八〉)の中で大英博物館所蔵本を紹介している。
- らも「『古版小説挿画史』に記載あり」とする『西川ひんふん雛形』が挙げられている。また、享保三年(一七一八)には『雛形西川夕紅葉』三橋佐江子氏「小袖模様雛形本集成―宝永から元文まで」(「天理大学学報」一四―三、昭和三八年〈一九六三〉)によると、原本未見なが が出版された。
- 『共立女子大学家政学部紀要』四七、平成一三年(二〇〇一)
- 『服飾美学』四〇、平成一七年 (二〇〇五)。
- \* \* \* <11000)° 小山弓弦葉「描かれた光琳模様小袖-西川祐信を中心に」(独立行政法人国立文化財機構監修 。 日 本の美術 光 琳 模様』、 平成二二

より、 く存在する。 ことができるのではなかろうか 小袖雛形本から、 意匠は、 主に服飾文化史からアプローチがされているが、祐信の描く小袖 以上、祐信が描く服飾意匠についてこれまでの研究を概観した。 祐信の 昨今になって注目され始めたため、 服飾 そのため、 風俗絵本、 表現に対する意図や当時の文化的背景も捉える 文字資料と視覚資料の両方を兼ね備えた 肉筆画へと今後視野を広げることに 検討すべき作品 は多

# 一、比較する資料について

絵本の小袖に使用されたモティーフを比較してみたい。 本稿では、主に市中の女性を描いた絵本を対象資料とし、祐信

を掲載している。 る。 大学附属図書館蔵本及び、、 を除く七三図を対象として検討することとした。 47 れている。 )階層を意識して構成されている。 風 まず祐信が描いた小袖雛形本として『正徳ひな形』をとりあげ 本書は正徳三年(一七一三)に出版され、 「若衆風」 小袖の意匠は 「野郎風」 本稿では、小袖雛形のうち「若衆風」と「野郎風」 「御所風」「お屋敷風」「町風」「けいせ 「ふろ屋風」と分類され、 今尾家所蔵本を底本とする『正徳ひ また、巻五は伊達紋一八九図 五巻五冊で構成さ なお、 着用する人々 東京藝術

な形』で用いた。

てい ているため対象資料として選定した。 を対象とした。。京都の四季風俗を紹介した版本で、『正徳ひな形』 は、 女性の全身像を半丁に一名ずつ描く体裁を採用している。本稿で 市中の女性を中心に描いた絵本である。 とりあげる。 に描かれる、 二点目に、 三点目に、延享三年(一七四六)に出版された『絵本都草紙 『絵本浅香山』のように小袖の意匠が画面や内容の中心となっ 『絵本浅香山』に描かれる三三名の女性を考察対象とした。。 る作品ではない。 女性の全身像を描いた絵本として『絵本浅香山』を 『絵本浅香山』 九八名の女性の小袖意匠を対象とする しかし、 は元文四年(一七三九)に刊行され、 当世風俗ともに女性が多数描かれ なかでも『絵本都風俗. 画面に背景はなく、主に 内

## **分類と傾向** 一、使用されるモティーフの

一】として提示する。図中に使用されたモティーフは、七九種類に及ぶ。参考のため、【表モティーフを小袖の図と説明書きから抽出した。対象とした七三まず、最も意匠が詳細な『正徳ひな形』において、使用されるまず、

表 「『正徳ひな形』 で使用されるモティ 1 フ 覧

モティーフ 朝顔、葦、栗、卯の花、梅、澤瀉、柿 杜若、柏、唐草、菊、桐、 河骨(葵)、桜、笹、芝草、菖蒲、水仙 杉菜、薄、菫、竹、橘、蒲公英、蔦 椿、萩、藤、松、茗荷、藻塩草、紅葉 柳、山吹、夕顔 渦水、霞、雲、波、雪輪、流水 網、編み笠、家、石掛、扇、笈(おい) 案山子、鉤、掛物、唐傘、刈田、土器 杵、柴垣、菅笠、暖簾橋、羽根、羽子板 屏風、風車、船帆、巻物、幕、御簾 貝、蜘蛛の巣、鶴、龍 亀甲、松皮菱、鱗、縞、青海波

弄 「器物」、「動物」、 徳 ひな形』 に 描 か 「幾何学」、 れたモティーフを本 「その他」 一稿で に分類した。 は 植植 物 分類 自

分類

植物

自然

器物

動物

幾何学

その他

源氏香、紋

か

がうことができる。

対 b て高く、 ることがわかる。 は 植 称な意匠とし、 想像上も含め の、「器物」 物」 覧にしてみると、 を花や草木、 植 物を積極的 は屏風や扇など形状のあるものを分類した。 動物やその一 以上の分類に含まれないものを「その他」とした。 特に、 自 さまざまなモノが意匠として使用されてい に小袖の意匠として採用していた様子をう 然」 植物に分類されるモティーフが割合とし を水や雷など自然現象を意匠化した 部を象っ たもの、 「幾何学」 は左右 「動物\_

香山』 徳ひな形』には掲載されていないモティーフを一覧化した。 ひな形』 茗荷や鶴は、 香山』 徳ひな形』 本浅香山』『絵本都草紙』の 次に『正徳ひな形』 『絵本都草紙』 『絵本都草紙』 に掲載され で使用されたことが判 巻五の てい 伊達紋に使用されていた。 にも使用されているか検討してみると、『絵 に描かれる女性の小袖意匠すべてが におい たの 小袖 では て使用され に描かれるモティーフの大半は『正 ない。 開し た。 そこで、【表二】には たモティーフを『絵 ちなみに、【表一】 しかし、『絵本浅 『正徳 本浅 0

東京藝術 大学附属図書館 蔵 本には、 伊 達紋 八 九図を収めた巻五も収蔵されてい

\* 6 『正徳ひな形 』はくおう社 |昭和四七年(一九七二)。本書には東京藝術大学本にはない「ふろ屋風」六十一番から七十二番までの十図が収録されてい

国立国会図書館蔵

国立国会図書館蔵

\* \*

【表二】「『正徳ひな形』に掲載されてい

ないモティーフ」

分類	モティーフ
植物	あざみ 桔梗 早蕨 鉄線 百合
動物	千鳥
幾何学	格子

千鳥、 川ひな形』 以上から、『絵本浅香山』と『絵本都草紙』は『正徳ひな形』と『西 は同書の中に掲載された姿絵に使用されていたことが判明した。 川ひな形』の小袖意匠を確認してみると【表二】に挙げた百合、 る体裁で、 の小袖雛形本に求めてみたい。享保三年に出版された小袖雛形本 『西川ひな形』に確認してみることとする。 では、 西川ひな形』も『正徳ひな形』と同様に小袖背面図を掲載す 桔梗が小袖背面図に使用されていた。また、格子について 【表二】に挙げたモティーフの典拠を祐信が手がけた別 小袖雛形に加えて袱紗の雛形も掲載されている。 に使用されるモティーフを基調として、 女性の服飾意 西西



▶右/図2:『絵本浅香山』国立国会図書館蔵

れるわけではなく、 祐信の手がけた小袖雛形本を起点として、他の絵本におけるモ ーフの使用を検証した。 袖の意匠において、 使用頻度の高低が存在したはずである。では いずれのモティーフも均等に使用さ しかし、 小袖雛形本や風俗絵本に描

ティ か

四

小袖意匠の比較

れる小

匠を描いたといえそうである。

次に、 傾向について検討してみたい 使用 頻度の高いモティ 1 フとその

や描き方の相違について検討する 小袖雛形本と風俗絵本との使用頻度の比較 いモティーフであることが判明した。 ティー を集計した。すると、 『正徳ひな形』で使用された七九種の 使用頻度の高いモティーフを中心に 「水」、「菊」、「梅」が使用頻度の高 フが小袖意匠の中で使用された回数 七九種のモティーフ そこ モ

五のあのなうい

浅香山.

『絵本都草紙』の中に描かれる小

に 0

お

7

ても確認することができた。『絵本

みならず、

『絵本浅香山』『絵本都草紙

#### 四 「水」を 用いた意匠

番

東、元

かき スパちゃ

結果と見てとることができるだろう。

モティーフに対するこだわりが反映された

のである。

この点は、

祐信の「水」と

61 う

用されたモティーフであることが判明した

袖意匠を分類していくと、

水」

が ?最も

使

坎

10

上白艺

らくさわけかの

南白東京

刘

用されていた。 描 『正徳ひな形』 されたモティーフは「水」であり、 た図の内、 渦水などのモティーフも含んでいる 最も『正徳ひな形』において使用 の中で、 図1は山吹と流水を組み合 六図において「水」 女性の小袖意匠を 流水や が 使



共に『正徳雛(ひな)形』東京 藝術大学附属図書館蔵

ζJ

は、 水

雁などの鳥とともに描かれてい

に関連するモティー

フを小袖の意

植物との組み合わせで描かれていた。ある

わせた意匠で、「水」を用いた意匠の多くが、

匠に頻繁に使用する傾向は

『正徳ひな形

水」 線を使用した描写はなく、 み合わせて描かれていることがわかる。 ひな形』 にあるように、 る様子がうかがえる。 少ない。 と比較して意匠を描くことが可能な面積が 『絵本浅香山』『絵本都草紙』で描かれる を用いた小袖意匠は、 と同様に「水」と植物や動物と組 そのため、 流水と千鳥、 雛形本のように細 しかし、 単純化されて ī 菊など 図2や図 徳ひな形 ī かな 徳

あれたろいろのう

しかられるんどの

# 四一二、「菊」を用いた意匠

多様な菊の意匠を確認することができる。図4のように花弁を一 れる描き方でも表現される。 続いて『正徳ひな形』で使用頻度の高いモティーフは「菊」であっ 一枚描く方法や図5のように花弁を省略した「光琳菊」と呼ば 菊は多くの小袖意匠の中で使用されているが、描き方を変え、

と『絵本浅香山』『絵本都草紙』の描き方が異なると言えそうである。 7のように花弁を省略した描き方が多く見受けられた。 に花弁の先端を鋭角にし、一枚一枚描く菊の花の多い 注目してみると、図6のような花弁が丸みを帯びた菊の花や図 として多く使用されていたことが判明した。ただし、菊の描き方に 方、『絵本浅香山』と『絵本都草紙』も同様に菊が小袖意匠に 『正徳ひな形』 図4のよう

が

国立国会図書館蔵 :『絵本都草紙』 匠化していった様子 うモティーフが丸み 経るに従い、 を帯び、より一層意 本の中では、 してみると、 三種の版本を比較 祐信絵 菊とい 年代を



## 四一三、「梅」 を用いた意匠

受けられる一方、 意匠がある。 描かれる梅は、 続いて梅を用いた意匠についてとりあげたい。『正徳ひな形』に また、 梅花のみを意匠化したものや梅花と枝をあしらった 図9のような、 図8のように花の内部まで詳細に描く意匠も見 光琳梅もしばしば描かれている。

がうかがえる。ただ

花をより意匠化した光琳梅と写実的に描く梅との両者が描か だという。 描 袖 ついては、『正徳ひな形』とは異なっていた様子がうかがえる。 古家氏によれば、 た。 ような梅の 雛形本の中でも最も早 か 小 ?れた梅の花はどれも歪みが少なく、 袖 雛形本の中で光琳模様は享保期頃から紹介されているがっ、 方、『絵本浅香山』と『絵本都草紙』に表現された梅に 『正徳ひな形』に表現された梅の花については、 花の描き方は、 『正徳ひな形』における光琳模様の使用は、 61 .例の一つだという!!。 祐信が考案した光琳模様表現の 様な形で描かれる。 加えて、 図 9 に れ 梅 小 種 ح て 0

10 ( 心かるれかりましまかり :「傾城風」『正徳雛(ひな)形』東京藝術大学附属図書館蔵

> うに花 弁 な た梅 になり、 は ることが 部を詳 0 "絵本浅香 )形もやや円 また、 図 花 弁 花 が を 細 10 でき に描 確 弁 0) 山 花 認 0 重 ょ

内

に

で

10

上なりまたり

17

す

すれてろの小名へよった

物中まえん

●図9:「傾城風」『正徳雛(ひな)形』東 京藝術大学附属図書館蔵

が 単 描き込む面積は小さくなる。 弁はほぼ円形となり、 形に近くなり『正徳ひな形』 フをより単純化、 れて描かれている。 "絵本浅香山" 湿描か ・純な比較は難しい。 れ ていることから、 や 簡略化して描く傾向にあったのではなかろうか 『絵本都草紙』は小袖雛形本と比較して意匠を やがて『絵本都草紙』では、 しかし『正徳ひな形』にも簡略化された梅 枝についても直線のみで表現されてい 祐信は年代を経るに従い、梅のモティ そのため『正徳ひな形』の意匠との に描かれる梅の花に比べて簡略化さ 図11のように花

\*10 本の美術 小山弓弦葉「小袖模様雛形本に見る流行の系譜 光琳模様』 前掲注5

\*11

前掲注4、

古家氏

「 日



:『絵本都草紙』国立国会図書館蔵

### 四 四 「葵」を用いた意匠

ととした。 に隔たりがあることを示す一つの事例と考えたため、 てみたい。 最後に意匠としての使用頻度は高くないが、 現 一在の我々が認識する意匠と江戸時代の人々との認識 「葵」をとりあげ 提示するこ

受けられ、 る。 葵は徳川家や徳川家に近しい家の家紋として広く認識されてい 徳川家の家紋として用いられた「三つ葵」は現在もよく知られ、 方 祐信の手がける小袖雛形本においても葵は意匠として 小 袖 |雛形本においても葵を使用した意匠はしばしば見

描かれていた。

がある。 水にかうほねのもやう

見すると葵に見える。

しかし、

小袖意匠の隣には次のような説明

図 12 は

『正徳ひな形』

に掲載された小袖意匠の一つであり、

かいいかろんろ くれるのだ

大学附属図書館蔵

みあらん

にまかからく

かうほねゆふぜん染いろく~小色入 すそ地あさぎあけぼの水かすりのり かたはむらさきにして

五所もん

はつれ雪の内 季のゑづくし

(※傍線は稿者による)

技法やモティーフについて説明が掲載されているが、

「葵」とは書

第2部 研究ノート

●図 12:「御所風」『正徳雛(ひな)形』東京藝術

10

でからずない

骨 7 は か な意匠として扱われているのだろうか れてい いるのである。 (こうほね)」と呼ば 傍線部にあるように「かうほね」すなわち「河 ない のである。 では一 れる植物として説明され 体 葵と認識してい 河骨とはどのよう 、た植 物

は、 また、 介されておりい、 かない。 葵と河骨の紋は、 ようになっ としては、 を象った紋のことを指す。 けだけではない 1骨紋は左右に発している点にあるとされる。 河 骨は 葵紋が権威のある紋章であるため、 河 実は、 .骨紋が葵紋と類似するようになったの 『日本紋章学』に「河骨紋」として紹 たと沼 葵紋は葉脈が 見分けの難しい意匠は、 河骨と呼ば 田 見しただけでは見分けがつ 氏は述べている。 放 葵紋と河骨紋の違い 射状に描 れる植物の葉と花 か しかし れ この 擬える るが 事

ゆる

0

か どう

か

調査を進める必要もあ

る。

加えて、

このようなモティー

フが他にも存在して

に イ

頼らず、

出

版当

莳

0)

記 は

載とも照合しなくて

ーフを判断する際に

現

在

の名称や分類

まれることは前述した。 ふひの丸」、 正徳ひな形』 図 14 に伊達紋を掲載した巻五 「あふひ車」、 その中には、 図 15 「丸にかう 図 13 が 含



ね

図

16

ひしの葉」と名付けられた伊達紋

れて

いる。

これらは

の下に名称

n

41

見

分けることは 伊達紋

で

図 7

13

から なけ

に ば、

そして菱の 難しい



n

1/2

るのである。

また、

うそれぞ

れ

別 16 n

0)

植 は、

物

が、 葵、

似した形状で描

紋 7

は

同

じ

河骨である図

12 図

ځ 15 類 河 骨、

0) 0

描き方とは 河骨とされ

●右から/図 13:「あふひの丸」・図 14:「あふひ車」・図 15:「丸にかうほね」・図 16:「ひしの葉」、全て 『正徳雛(ひな)形』東京藝術大学附属図書館蔵

葉と 別 なっ 伊 あ 掲 掲 0 モ る あ は か ほ は ッろう。 う。 真載さ 就載さ テ ŋ の 見 達 ならないことを示す事例といえよう。 4 以

け

難し

いモティ

1 類

フが存在していた。 似して一見しただけ

個 で

モ 分

テ

イ 0

1

フを取り上げたことで判明した点

上の てい

ように、

形

状

が

ك 18 図 17 、 は 見すると葵に見える小袖 『正徳ひな形』 『絵本都草紙』 図 18 に掲載された図12よりも葉 意匠は にも登場する。 『絵本浅香 図 山



だろうか。 
葵と認識する意匠も、当時の人々にとっては異なる意匠であったのとして描いたのか判断することは困難である。現在の我々が見ると図17と図18を見る限りでは、葵として描いたのか、河骨や別の植物図が出いる。 
家と記識する意匠も、当時の人々にとっては異なる意匠であったの、

意匠とその名称を整理して、判断するという手続きを踏むこともことも可能な場合もある。しかし、まずは当時に認識されていた絵画資料に描かれた小袖意匠は、階級や当時の流行を読み取る

必要である

■図18:『絵本都草紙』国立国会図書館蔵 | 国立国会図書館蔵 | 国立国会図書館蔵 | 大わりに | おわりに | 以上のように、本稿では祐信が描いた小袖雛形本を起点として | 松のみならず、祐信のように絵師の画業を辿ることが可能な場合 | もある。そして、染織技法を記したテキストを活用することにより意匠を整理・読み解くための重要な資料としての機能も有して | いたといえる。今後はこの点を念頭に、考察を深めていきたい。

していくと、『正徳ひな形』では、水、梅、菊が頻繁に用いられり意匠を整理・読み解くための重要な資料としての機能も有していたといえる。今後はこの点を念頭に、考察を深めていきたい。とした絵本、京都の風俗を描いた絵本という内容が異なる版本でとした絵本、京都の風俗を描いた絵本という内容が異なる版本でとした絵本、京都の風俗を描いた絵本という内容が異なる版本でとした絵本、京都の風俗を描いた絵本という内容が異なる版本で

9

化的背景の関係については、 に小袖意匠として人気のあったモティーフが、 信 中 配慮していた様子がうかがえるのである。特に小袖意匠が内容の と同様の傾向を読み取ることができた。つまり、 n が 意匠を描くにあたり、 ていたことが新たに判明した。また、『絵本浅香山』『絵本都草紙 `雛形本と絵本に描かれる小袖意匠が一定の傾向を示した点と文 いていたとも考えられるだろう。 小袖意匠 小袖意匠に見受けられた点は興味深い。そして、このような祐 心ではない『絵本都草紙』についても小袖雛形本と同様の傾向 の雛形本、 [に使用されるモティーフについても、 絵本に見受けられたモティーフの傾向は、 風俗絵本についても、モティーフの選択に 今後の課題としたい 今回の考察を経て判明した祐信 直接絵本に反映さ 祐信自身が小袖 『正徳ひな形』 出版当時

描く小袖意匠を肉筆作品などとも関連させながら捉えていく必要表現方法の変化についてもさらに深めていきたい。また、祐信がり、モティーフの描き方が変化している様子を読みとることができた。今後は、さらに作品の範囲を広げ、祐信が小袖意匠を描くら、それぞれの絵本の回個別にとりあげたモティーフについても、それぞれの絵本

もあるだろう

#### [付記]

本稿は第二回西川祐信研究会の口頭発表に基づくものである。本稿は第二回西川祐信研究会の口頭発表に基づくものである。本稿は第二回西川祐信研究会の口頭発表に基づくものである。